



小児科 病棟医長
いはら ゆきこ
井原 由紀子

小児医療センターについて～病棟編～

小児医療センター病棟は新館病棟の5階に位置しています。ひびのこづえさんデザインの、やさしくあたたかな空間のもと、総病床数38床、その他長時間ビデオ脳波記録などを施行する検査室や、子どもたちの生き生きした表情・声にあふれるプレイルーム等の設備を配しております。病棟スタッフは医師10名、看護師45名、保育士1名、チャイルドライフスペシャリスト(CLS) 1名、臨床心理士2名や児童虐待専門コーディネーター、その他多くのコメディカル、スタッフが、様々な視点から病氣と向き合う子どもたちのために協力して関わっています。

「その子どもの幸せのために」

これは、私たち福岡大学小児科のクレド(信条、志)です。困った時、迷った時にはこの言葉を道しるべとして、何がその子どものために大切なのか、何が必要なのか、子どもたちを中心に、皆で支えていけるよう努めています。

福岡大学病院小児科ではいち早く病棟に保育士を配属し、医療的ケアの中で子どもたちの日々の成長発達を見守りつつ、診療を行ってきました。2010年からはCLSも加わり、共に遊びを通じた子どもたちへの発達支援、心理社会的支援を行っています。病棟では、毎月の行事を企画し、春のお花見から始まり、秋のお月見、冬のクリスマス会など、月ごとに季節感あふれる趣向をこらした手作りの行事があります。今年の夏もたくさんの出店やお神輿、西瓜割り、笑顔でにぎわう夏祭りが開催されました。日々の診療の中では目にすることのできない、子どもたちの思わぬ表情を目にし、ご家族も病室での不安や疲れ、緊張感から少しでも気分転換できる場になっているのではないかと思います。その他、ボランティアの方々センターを訪問され、バルーンアートや親子での制作活動なども行われています。特別なイベントだけでなく、CLSは侵襲性のある検査などに対し、子どもたちがその子なりに必要性や意義を理解し、一緒に病氣と向き合って乗り越えていけるよう、検査や処置前に事前の説明、付添い見守り、ケアを行っており、保育士は病室やベッドから移動困難な子どもに対してお部屋でできる遊び、絵本の読み聞かせなどその子の成長発達に応じた関わりをすすめています。心理士は子どもだけでなく、長時間一緒に病院で過ごされる付添いのご家族に対しても、必要に応じ家族の思いを傾聴しメンタルケアを行っています。また、学童期で学校に通っている子どもたちは、病氣の治療の合間に院内学級に通い、先生の病室訪問をうけ、日々勉強にも頑張っています。

医師・看護師だけでなく多職種様々なスタッフが、それぞれの子どもたちと一緒に頑張る気持ちで業務に努めております。これからも、私たちは、その子どもの幸せのために、その笑顔のために、その未来のために、よりよい医療を提供していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



小児科 外来医長
ふじた たかこ
藤田 貴子



小児医療センターについて～外来編～

●断らない医療と迅速な対応を心がけ

大人と違って子どもは症状の訴えが曖昧で、状態も変わりやすいといった特徴があります。大人は自分の症状から適切な科の受診ができますが、子どもはすべての疾患の入り口が小児科外来となっております。私たち小児科医は各人が総合診療医としての側面と、小児神経科医、小児アレルギー科医といった専門医としての側面を兼ね備えています。小児科外来ではまず総合診療医として全身を診察し、その後必要な専門外来へとつなぎます。専門外来に関しては内分泌・代謝、神経、アレルギー、腎臓、新生児・発達、血液、循環器などに分かれており、予約制となっております。

平成26年に福岡市立こども病院が移転し、福岡市南西部を中心として地域に根ざした小児救急対応および専門性の高い医療を、迅速に提供していくことを心がけております。

●少しでも快適にすごせるように・・・

具合が悪い子どもを連れての受診は容易ではありません。外来の設備としては、待ち時間の負担が少しでも軽減できるよう、待合室の一区画に図書スペースと子どもが座って遊べるようマットを敷いたスペースがあります。授乳室も小児科外来受付近くに設け、呼ばれてもすぐに分かるようにしております。また隔離が必要な感染症のための診察室や、状態が悪く待合室で他の子どもと一緒に待てない場合の外来観察室という個室が5つ整備されております。



●児童虐待防止拠点病院として

児童虐待件数が年々増加していることを受け、国の事業として平成24年度から「児童虐待防止医療ネットワーク事業」が開始されました。この事業は中核的な医療機関を中心として、その地域の児童虐待に対する対応力の向上を目的としています。福岡大学病院は今までの虐待に対する対応が評価され、平成26年7月に福岡市より「児童虐待防止拠点病院」に指定されました。約3年経過しましたが、福岡市の各医療機関や市と連携して、虐待の徴候を見逃さない取り組みを行っています。

●教育機関として

福岡大学病院小児科は日本小児科学会専門医制度研修施設のみならず、日本小児神経学会小児神経専門医制度研修施設、日本てんかん学会専門医認定研修施設、日本アレルギー学会アレルギー専門医教育研修施設、日本小児血液・がん学会日本小児血液・がん専門医研修施設、日本糖尿病学会連携教育施設(小児科)に認定されています。より専門性の高い小児医療を提供できる施設であるとともに、将来専門医を目指す若手医師にとっても多くのことを学べる施設でもあります。

これからも「その子どもの幸せのために」という信条のもと、最善の医療を提供できるよう努めて参ります。





消化器内科 准教授
内視鏡部 診療部長
たけだ つ ひでとし
竹田 津 英稔

消化管疾患の最新治療

消化器内科では食道から大腸までの消化管疾患に対し、幅広く診療を行っています。特徴的な疾患としては炎症性腸疾患、上下部腫瘍に対する内視鏡治療、小腸疾患、消化管出血があり、各疾患の最新治療について紹介させていただきます。

1.炎症性腸疾患

炎症性腸疾患とは潰瘍性大腸炎(UC)とクローン病(CD)からなる慢性の炎症性疾患です。患者数は急激に増加し、UCは日本全国で約20万人に達し世界第二位の患者数となっており、CD も現在約4万人に達し、今後も増加が予想されています。

これらの疾患は未だ発症の原因は不明で、完治させる治療法はありませんが、適切な治療が行われれば、安定した生活を送ることができます。当院では、約400名の患者さんを診療しています。抗TNF α 抗体製剤などの分子標的治療、免疫抑制剤など専門的治療だけでなく、国際共同治験を含む臨床試験へ参加し、世界最先端の医療に携わっています。

2.上下部腫瘍に対する内視鏡治療

最新の内視鏡機器を使用し、食道・胃・大腸の早期がんに対して、ESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)を積極的に行っています。従来、輪っかをかけて切除するEMR(内視鏡的粘膜切除術)を行っていましたが、切除できるサイズの限界・遺残再発等の問題がありました。

これを克服した治療法がESDで、高周波ナイフにより粘膜下層を切開・剥離し、大きな病変でも一括で切除できます。また従来の開腹手術が必要であった病変も治療可能となりました。治療は1～2日間の絶食と3～7日間の短期入院で行われ、退院後は通常の生活を送れます。当科では2005年よりESDを導入し、2016年12月までに約900例の治療を行っています。

3.小腸疾患

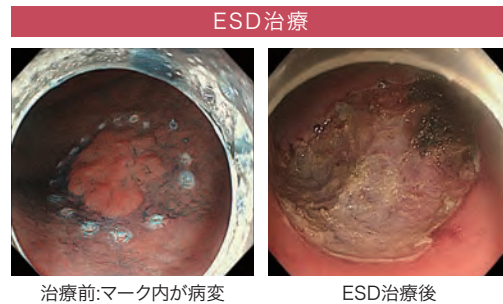
小腸は全長約6mに及ぶ体内で一番長い管腔臓器であり、以前は病気の診断は小腸X線検査が主流でしたが、詳細な評価が困難であり、“暗黒大陸”と言われていました。しかし、2003年にダブルバルーン式小腸内視鏡が、2007年に小腸カプセル内視鏡が保険認可され、小腸疾患の診断・治療が飛躍的に向上しました。

当科では2004年にダブルバルーン式小腸内視鏡、2009年に小腸カプセル内視鏡、2016年にパテンシーカプセルを導入して診断・治療を開始し、現在までダブルバルーン式小腸内視鏡を約150例、小腸カプセル内視鏡を約300例行っています。

4.消化管出血

24時間体制で消化管出血に対する内視鏡的治療を施行しています。2016年度は、約70例の上部消化管出血に対し内視鏡的止血処置を施行しました。下部消化管出血は、約50例の大腸憩室出血や出血性直腸潰瘍等の出血症例に対し、止血処置を施行しています。

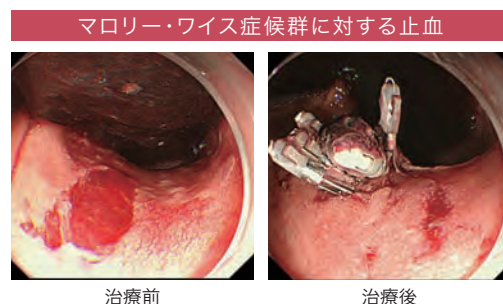
内視鏡的止血法の選択は、2015年8月に内視鏡学会より発行された、最新の非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドラインを参考に診療を行っています。



ESD治療



小腸癌



マロリー・ワイス症候群に対する止血

C型肝炎の最新治療



消化器内科 医局長
もり ほう だいすけ
森原 大輔

● C型肝炎とは…

C型肝炎ウイルスによって肝臓に炎症が起り、肝機能の異常が続く病気です。日本には、150～200万人の患者さんが存在しているといわれています。C型肝炎ウイルスが肝臓に感染して炎症が起きても、ほとんど自覚症状はありません(肝臓＝沈黙の臓器)。さらに、約70%の割合で慢性肝炎へと移行し、この状態が長年続くと肝硬変や肝がんへと進展していきます。

● まずは、C型肝炎かどうか検査を受けることが大切

肝炎ウイルスに感染しているかどうかは、血液検査で分かります。検査は、お住まいの都道府県等の保健所、ほとんどの病院や診療所で、無料で受けることができます。以下のような方々は、C型肝炎の可能性が一般の方より高いと考えられています。

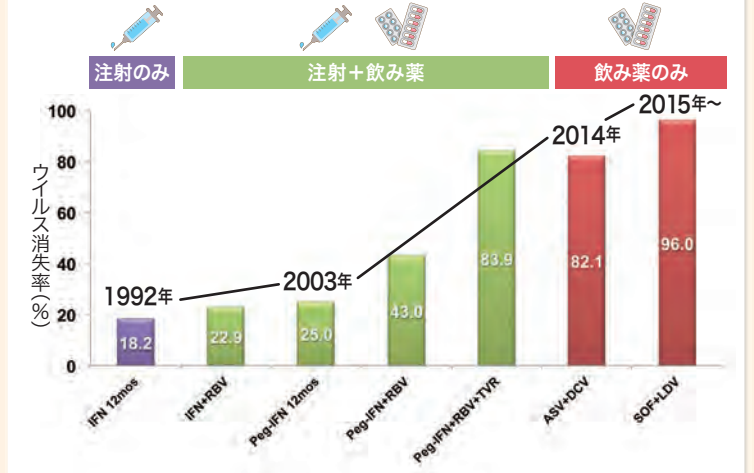
- | | |
|-----------------------------------|---|
| ①薬物濫用者、入れ墨をしている | ⑥長期に血液透析を受けている |
| ②ボディピアスを施している | ⑦大きな手術を受けた |
| ③輸血を受けたことがある | ⑧以前に鍼治療を受けた |
| ④非加熱血液凝固因子製剤を投与された | ⑨過去に健康診断等で肝機能検査の異常を指摘されているにも関わらず、その後肝炎の検査を実施していない |
| ⑤フィブリノゲン製剤(フィブリン糊としての使用を含む)を投与された | |

● 最新のC型肝炎治療

- ✓ 飲み薬だけで治療を行います。注射(インターフェロン)は使用しません。
- ✓ 成人であれば、特に年齢制限はありません(詳しくはご相談を)。
- ✓ 治療期間は、2～3か月(4か月)です。
- ✓ 副作用は、ほとんどありません。
- ✓ 治療を受けた約95%の人でC型肝炎ウイルスが消失します。
- ✓ 肝炎助成制度が利用でき、患者さんの治療費負担は3か月で3～6万円です。



C型肝炎の治療成績は、飛躍的に向上しています。



福岡大学消化器内科における治療成績

肝がんに対するフュージョンイメージ下のラジオ波焼灼術

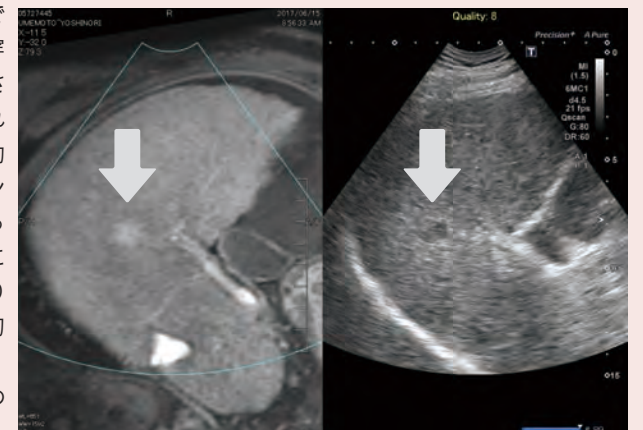


消化器内科 病棟医長
たかた かずひで
高田 和英

肝細胞がんの標準的な治療のひとつにラジオ波焼灼術(RFA)があります。経皮的に肝内の腫瘍に直径1.5ミリの電極針を挿入し、ラジオ波電流を流すことにより、電極周囲に発生させた熱で病変を焼灼する治療で、一般に開腹手術に比べて体への負担が少ないことが特徴です。当科ではこれまで2000例以上の治療実績があり、最近では肝細胞がん以外に、他臓器がんからの転移による肝腫瘍に対してもこの治療を行っています。

電極針の穿刺は、超音波診断装置での観察下で行うのですが、超音波での検出が困難な病変では穿刺ができない場合もあります。2017年1月に導入された最新の超音波診断装置には、治療前に撮影されたCTやMRI画像を、超音波画像のリアルタイムな動きに連動させ、病変検出をサポートするフュージョン機能が備わっています。この機能により、従来は超音波での描出が困難であったり、合併症の危険が高い部位にあるためにRFA治療ができなかった病変に対しても、安全性を確保しながら積極的に治療を行うことができるようになりました。実際に、新規超音波機器導入後から当科におけるRFA件数は飛躍的に増加しており、多くの患者さんがRFA治療の恩恵を受けています。

今後ますます多くの患者さんのお役に立てるよう、治療技術の研鑽に努めていきたいと考えています。当科では、RFAだけでなく、個々の肝臓病患者さんに適した治療ができるよう日々活動しています。肝臓病の治療について知りたい方は、ぜひ当科にご相談ください。



左側が治療前に撮影した肝臓のMRI画像。右側がリアルタイムに観察している超音波画像。矢印で示されているのが、肝がんです。フュージョン機能により、両者の位置関係が一致しているのが分かります。